ヘロドトス『歴史』第4巻に出て来る スキタイ語の印欧語的分析

吉　田　育　馬

キーワード：ヘロドトス『歴史』，印欧比較言語学，インド・イラン語派，スキタイ語，固有名詞

Ⅰ．本稿の目的

スキタイ語は紀元前8世紀より現在のウクライナ，南ロシアで活躍した，史上最初期の遊牧騎馬民族[1]で，インド・ヨーロッパ語族（印欧語族）イラン語派に所属するとされるスキタイ人（希 Σκύθαι，羅 Scythae）の言語である。この言語で記された碑文は，ヒッタイト象形文字[2]で記された極僅かのものがひょっとしてそれではないかとも考えられているが，この不確かなものを除けば，碑文等の直接記録は一切なく，アッシリア語の楔形文字粘土板碑文やアカイメネース朝ペルシャ[3]（紀元前550〜紀元前330）の古代ペルシャ語の楔形文字記録とヘロドトス『歴史』（希 Ἱστορίαι）に出て来る固有名詞（人名，神名，地名）やスキタイ特有の物産名にその痕跡を残すのみである。本稿ではこのうちヘロドトス『歴史』，その中でもとりわけ第4巻に出て来る固有名詞にスポットをあて，それを印欧比較言語学によって形態論的分析をおこなったうえで，インド・イラン語派としてのスキタイ語の特徴を描き出してみたい。

Ⅱ．ヘロドトス『歴史』に出て来るスキタイ語の固有名詞

ここではヘロドトス『歴史』に出て来るスキタイ語の固有名詞を語幹毎に分類し，印欧語的分析を行なってみる。結果は以下の通りである。

（1）　これ以前に同じ地域で，恐らくイラン系と目されるキンメリア人（希 Κιμμέριοι）がいた。この民族はアッシリアの楔形文字粘土板碑文にも出て来る他，ホメーロスの『オデュッセイア』にも黒海北方の謎の民族として出て来る。

（2）　印欧語族アナトリア語派ルウィ語群に属する象形文字ルウィ語を記しているが，名称としてはこう呼ばれる。トルコ南東部やそれに隣接するシリアから碑文は出土する。同じ語派にヒッタイト語が所属し，ルウィ語群にはギリシャ時代にギリシャ文字系のアルファベットで記された200〜300枚の碑文によって知られるリュキア語（紀元前5〜紀元前4世紀）がある。

（3）　ギリシャ語文献での Ἀχαιμένης からだが，古代ペルシャ語の Haxāmaniš（原義「友としての心を持つ」）の古代ギリシャ語イオニア方言的音写。

ｉ．o- 語幹（英 *o-stem*）

Γ*οι*τό-συρος（スキタイの Ἀπόλλων　原義「生き物に富める神」）Hdt. 4.59

〈前分〉　Γ*οι*τό-

←スキタイ語　*g*ai*θa-

（古代ペルシャ語　g*ai*θām-cā[4] *f. acc. sg.*（Behistun 大碑文第一欄）「そして家畜を」）

（山中 2008：93, Kent 1953：27–28, 35–36）

＜印欧祖語　*g^w*oi*H_3-t-H_2-o-s（o 階梯）

～　*g^w*i*H_3-g^w-ó-s（零階梯）《部分畳音形》

＞ラテン語　vīvos＞vīvus

英語　quick

〈後分〉　-συρος

←スキタイ語　*sūra-「富んでいる，富める」

（アヴェスタ語　sūra-）

Σαύλιος[5]（原義「浄められた者」）Hdt. 4.76［3×］

←スキタイ語　*sau*l*iya-

*sau*ð*iya-[6]

＜イラン祖語　*sau*d*iya-

＜インド・イラン祖語　*šau*d*^{h}iya-

＞梵語　śō*dh*iya-「浄められた」

（C. B. ККулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*）

Θαγιμασάδας（スキタイの Ποσειδέων）Hdt. 4.59

Βορυ-σθένης（現 Днепр/Dnjepr 川　原義「広い場所」）Hdt. 4.5, 18［3×］，24, 45, 47, 53［3×］，54［2×］，56［2×］，81, 101

〈後分〉　-σθένης

←スキタイ語　*stān*a*-（古代ペルシャ語 stān*a*-「場所」）

＜印欧祖語　*steH_2-no-

cf. ラテン語　stō, stāre「立つ」

（４）　印欧祖語時代の後舌母音 *o の前なので，*g^w は硬口蓋化（英 *palatalization*）を起こさず，g となった。印欧祖語時代の前舌母音 *i, *e と半母音 *j の前では硬口蓋化を起こし，j /dʒ/となった（Kent 1953：27）。ラテン語の vīve（*imper. 2 sg.*）「生きろ」に対応する古代ペルシャ語形は jīvā（Behistun V. 19–20, 35）であり，これは印欧祖語の *g^w*íH*$_3$-w-e に遡（さかのぼ）った。

（５）　この語からスキタイ語ではインド・イラン祖語での二重母音が保存されていたことがわかる。直前の Γ*οι*τό-συρος も同様である。梵語では融合して単なる長母音になっていた。

（６）　イラン祖語の母音間の *d はスキタイ語ではまず摩擦音化して紀元前 7 世紀迄（まで）には *ð となったあと，紀元前 5 世紀迄（まで）には l となっていたらしい。l の段階はヘロドトス『歴史』（紀元前 5 世紀中葉）より窺い知ることが出来るが，アッシリアの紀元前 7 世紀の楔形文字粘土板（くさびがたもじ）ではスキタイのことが Iškuzāi, Ašguzāi と z で記されていたので，*ð の近似音の z で写されていた模様である。Σκύθαι に対する Σκύλης（107 頁），Σκολότοι（108 頁）を参照のこと（C. B. Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*）。

stāmen, -inis *n*.「縦糸，（糸巻き棒の）織り糸，雄蘂（おしべ）」

（Georgiev 1981：329）

Σκύλης Hdt.4.78［5×］，79［3×］，80［5×］

←スキタイ語　*skuð*a*-

＜印欧祖語　*skud-*ó*-s「撃ち手」→Σκύθαι

Τύρης（現 Днестр/Dnjestr 川（Georgiev 1981：329）原義「強き（川）」）Hdt. 4.13, 47

←スキタイ語　*tūr*a*-

（梵語　tur*á*s「強い」）

＜印欧祖語　*tuH$_x$-ró-s

～　*tu-r-*ó*n-es

＞ガリア語　Tur*o*nēs[7]（Tŭrŏnes Luc. *Phars*.1.437）

（＞仏　*Tours*）　（Georgiev 1981：329）

Ἀρμ-ασποί（原義「最高の馬を持つ人々」）Hdt. 4.11

〈前分〉　Ἀρμ-

←スキタイ語　*ar*im*a-「最高の」

＜印欧祖語　*ar-*im*o-（＜*H$_2$er-*im*o-）《最上級》

＞ルシタニア語　ar*im*om（Arroyo del Puerco）

〈後分〉　-ασποί

←スキタイ語　*asp*a*-「馬」

（＞オセット語　jæfs/æfsæ）

（George Hinge 2005 *Herodot zur skythischen Sprache*）

＜イラン祖語　*asp*a*-

（＞古代ペルシャ語　Asp*a*-čanā^h[8]（Darius *Naqš-i-Rustam* d）（Kent 1953：173）

→ギリシャ語　Ἀσπ*α*-θίνης Hdt. 3. 70［2×］，78）

＜インド・イラン祖語　*ášw*a*h *m*.（印欧祖語 *e＞インド・イラン祖語 *a）

（＞梵語　áśv*a*s *m*.「馬」）

＜印欧祖語　*ékw*o*-s *m*.

＞ラテン語　equ*o*s＞equus *m*.「馬」

ガリア語　Ep*o*-rēdo-rīx（原義「馬乗り王」）Caes. *B.G.* 7. 38

リュキア語　esb*e*（印欧祖語 *o＞リュキア語 e）

ゴート語　aíh*u*a-tundjai[9]/éxʷ*a*tʊndjaɪ/（*sg. dat.*）*f*.「茨（いばら）の木」（原義「馬の歯」）（印欧祖語 *o＞ゲルマン祖語 *a＞ゴート語 a）

（７）　地名の Turónia がフランスの地域名 *Touraine*/tuʁɛ̃n/ になった。

（８）　後分の -canā^h は梵語の cánas-「愛，欲望」に対応し，全体としては「馬を愛する者」の意である（Kent 1953：173）。複合語内では Aspa-「馬」が目的語であり，OV 型をとっている。

Σκύθ*αι*（原義「（矢を）射る者達」）Hdt. 4.1［6×］etc.

←スキタイ語　*skuð*a*- *m.*

＜印欧祖語　*sk<u>u</u>d-*ó*-s *m.*（零階梯）

～　*sk<u>éu</u>d-ono-m *n.*（e 階梯）

＞ゲルマン祖語　*skéutanam *n.*

＞古英語　ṡcēotan

（＞英語　shoot）「撃つ，射る」

ドイツ語　schießen

Σκο<u>λ</u>*ό*τοι　Hdt. 4.6

←スキタイ語　*sku<u>ð</u>*a*-ta《複数》

Παρα-<u>λ</u>*ά*τ*αι*[10]（原義「前に置かれた」）Hdt. 4.6

←スキタイ語　*para-ðāt*a*-

＜印欧祖語　*d^h<u>e</u>H$_1$-t*ó*-s[11]（e 階梯）

～　*d^h<u>H̥</u>$_1$-t*ó*-s（零階梯）

＞ギリシャ語　θετ*ός*「置かれた」

（C. B. Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*）

Ἀρπό-ξαϊς（原義「水を支配する」）Hdt. 4.5, 6

←スキタイ語　*ā*rf*a-「水」（イラン祖語 Cr＞スキタイ語 rC/V_V）

＜イラン祖語　*ā*fr*a-[12]

（9）ゲルマン祖語では印欧祖語時代の無声閉鎖音 *p, *t, *k, *k^w は一旦それに対応する摩擦音 *f, *þ /θ/, *χ, *χ^w になったあと，直前母音にアクセントがあるか語頭ではそのままとどまった（英 *Grimm's law*）。これはその例であり，印欧祖語時代の語頭の *e にアクセントがあったことがわかり，梵語とも一致し，強力な証明力となっている。直前母音無アクセントのときは有声化して，*β, *ð, *γ, *γ^w（＞*w）となった（英 *Verner's law*）。

（10）2 頁の Σα<u>ύ</u>λιος の註 5 を参照。ここでもイラン祖語時代の母音間の *d は摩擦音化して *ð を経て，/l/になっている。直前の Σκο<u>λ</u>ότοι も参照のこと（C. B. Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*）。

（11）これの *-nó-s による異形がゲルマン語の過去分詞になった。

印欧祖語		*d^{h}eH$_1$-nó-s
＞後期印欧祖語		*d^{h}ēnós（*eH$_1$＞*ē　代償延長（英 *compensatory lengthening*））
＞ゲルマン祖語		*dǣnás（印欧祖語 *ē＞ゲルマン祖語 *ǣ, 印欧祖語 *o＞ゲルマン祖語 *a）
＞		*dǣnáz
＞西ゲルマン祖語		*dāna　（ゲルマン祖語 *ǣ＞西ゲルマン祖語 *ā）
＞英語		d*o*ne　（西ゲルマン祖語 *ān＞アングロフリージア ōn）
＞ドイツ語	ge-	*t*an　（*d＞t 第二次子音推移（独 *zweite Lautverschiebung*））

（12）無声閉鎖音 *p, *t, *k, *k^w を T（羅 *<u>t</u>enuēs*）で表し，無声摩擦音を F（羅 *<u>f</u>rīcātīvus*）であらわす

▼インド・イラン祖語 *TC＞イラン祖語 *FC

梵語	*kṣát*ram *n.*	*pr*iyás「親愛なる」
古代ペルシャ語	*xša*θr*a-pā-	
サールマティア語		**Fl*iya-managos（原義「親愛なる心を持つ」）
ギリシャ語表記	σατράπης	Φλιμάνακος（Olbia）
		Φλείμναγος（Olbia）

（George Hinge 2005 *Herodot zur skythischen Sprache*）

＜インド・イラン祖語　*āpra-
＜　*āpro-
＜印　欧　祖　語　*H_2ēp-*r*-o-（零階梯）
～　*H_2ēp-*er*-jo-s（e 階梯）
＞ギ リ シ ャ 語　Ἤπειρος「エーペイロス（ギリシャ西北の地域で，原義は「陸地」）」
n- 形 *sg. N.*　*H_2éb-ō　＞ヒ ッ タ イ ト 語　*ḫap*a*-š「川」
Acc. *H_2éb-*on*-m̥　＞ブリタンニア語　Ab*on*a
（＞ウ ェ ー ル ズ 語　af*on*/ávon/（→英語 Av*on*）「川」）
G.　*H_2(e)b-*n*-és　＞パ　ラ　ー　語[13]　*ḫap*n*aš
〈後分〉　-ξαϊς
←ス キ タ イ 語　*xšaya-「支配する」
cf. ギ リ シ ャ 語　κτάομαι「所有する」
Λιπό-ξαϊς（原義「山を支配する」）Hdt. 4.5, 6
←ス キ タ イ 語　*ripa-「山」
Ἀρι*α*-πείθης　Hdt. 4.76, 78［4×］
←ス キ タ イ 語　*ary*a*-
＜インド・イラン祖語　*ary*á*-（印欧祖語 *o＞インド・イラン祖語 *a）
（＞梵　語　āriy*a*-
ary*á*s「高貴な」）
＜印　欧　祖　語　*ar-j*ó*-s（＜*H_2er-j*ó*-s）
＞ゲルマン祖語　Ari*o*-vistus Caes. *B.G.* 1.31
Κολ*á*-ξαϊς（原義「太陽を支配する」）Hdt. 4.5, 7
←ス キ タ イ 語　*x^wary*a*-「太陽，日」
＜印　欧　祖　語　*s(e)H_2-w*e*l-j*o*-s（e 階梯）
（＞ギ リ シ ャ 語
（ラコニア方言）　ἀβέλιος（β＝/v/）
（イオニア方言）　ἠ(ϝ)έλιος
（アッティカ方言）　ἥλιος「太陽」）
～　*sH_2-wṓl（ō 階梯）

(13)　1906 年（明治 39 年），ドイツ帝国の Hugo Winckler 率いるドイツ考古学隊がオスマントルコ帝国の Boğazköy（現トルコ共和国 Boğazkale）にあった，ヒッタイト帝国の公文書庫を発掘した際出て来た楔形文字粘土板に記録されていた言語のひとつで，その圧倒的多数に記録されていた帝国の公用語ヒッタイト語と同時代の古代語。ヒッタイト語とは同じ印欧語族アナトリア語派に所属し，文献年代は紀元前 16 世紀から紀元前 15 世紀。80 枚ほどのよくわからない粘土板碑文に記録されているだけであり，アナトリア語派では最も不明の言語。

ラテン語　sōl「太陽」

Ὀκταμα-σάδης　Hdt. 4.80［6×］

←スキタイ語　*uxtam*a*-?《最上級》

（梵語　-tam*a*s

ラテン語　in*timus*, ex*timus*, ci*timus*, ul*timus*

ガリア語　Ver*tama*-coriī Plin. *N. H.* 3.124

ウェールズ語　gwar*thaf m.*「頂上」，ei*thaf*「極端な」）

Σπαργα-πείθης　Hdt. 4.76, 78

Ἐνάρεες（原義「おんなおとこ」）Hdt. 4.67

←スキタイ語　*ān*a*ra-

＜印欧祖語　*ṓ-H_2n*o*r(-o)-[14]

（*cf.* ギリシャ語　ἀγήνωρ　*acc. sg.*　ἀγήνορα）

←印欧祖語　*H_2nḗr-,　*acc. sg.*　*H_2n*é*r-m̥,　*gen.*　*H_2n̥r-és *m.*「男，夫」

＞ギリシャ語　ἀνήρ,　*acc. sg.*　ἀνέρα,　*gen.*　ἀνδρός *m.*「男，夫」

3, 5 頁にも述べた通り，印欧祖語の *o はインド・イラン祖語で *a となり，イラン祖語でも *a, そしてこの音はスキタイ語でも /a/ のまま引き継がれた。上の Ἐνάρεες も参照のこと。したがって，ラテン語で -us＜-*o*s, ガリア語で -*o*s, ケルトイベリア語でも -*o*s, ギリシャ語で -*o*ς, 小アジア中央部の古代語プリュギア語で -*o*s, ルーン文字碑文原ノルド語で -*a*z, 現在のブルガリアで話されていたトラーキア語で -*a*s, リトアニア語で -*a*s, ヒッタイト語でも -*a*s と殆（ほとん）ど同じ形で現われる，男性名詞を代表する印欧祖語の *-*o*-s はインド・イラン祖語でもイラン祖語でも *-*a*s になっていた筈（はず）であり，スキタイ語では *-*a*s であった。そしてこれは複合語前分の幹母音（かんぼいん）（英 *thematic vowel*）としては -a- で現われた筈（はず）であり，事実これは 109 頁の Ἀρια-πείθης 以下ではギリシャ文字表記で -α- で現われている[15]。ギリシャ語文献での Σκύθα*ι*, ラテン語文献での Scyth*ae* を初めとしてイラン系の民族が男性名詞なのに，どうして女性名詞の代表格である第一曲用の ā- 語幹（英 *ā-stem*）で現われるのかは，本来は男性名詞を代表した，印欧祖語の *-o-s がスキタイ語や古代ペルシャ語では -a(s) になっていた故（ゆえ），音色（ねいろ）の上で近い第一曲用の -a, -ae で音写されたからである。ヘロドトスの音写の正確さを物語るものであり，ここにギリシャ・ローマ時代の歴史書，地理書に記録されている異民族語の固有名詞が比較言語学的にも大いに価値を持つことがわかるのである。

---

(14)　印欧語では複合語後分では母音が o をとることがあった。ギリシャ語の φρήν, *nom. pl.* φρένες「心，横隔膜」に対する ἄ-φρων, *nom. pl.* ἄ-φρονες「気の触れた」やラテン語の terra「大地」に対する ex-torris, -is, -e「追放された」等を参照のこと。この場合，o をとる複合語後分はアクセントを持たなかった（吉田育馬 1993：73–75）。

(15)　印欧祖語では当然 *-o- であり，古代ギリシャ語では Ἥρ-*ó*-δοτος, Ἀριστ-*o*-τέλης, Ἵππ-*o*-κράτης, ガリア語では Ver-cinget-*o*-rīx, Bodu-*o*-gnātus, Camul-*o*-genus, ロシア語では вод-*o*-во́д/vod-*o*-vód「水道管」，ラテン語でも唇音（しんおん）の前では Ahēn-*o*-barbus, Sacr-*o*-vir とそのままの形で現われている。

ii．eH$_2$- 語幹（英 *eH$_2$-stem*）

Ἀργί-μπασα（原義「火でもって最も良い女神」）Hdt. 4.59

〈前分〉		Ἀργί-「火」
	←スキタイ語	*ā*rθ*a-（イラン祖語 Cr＞スキタイ語 rC）
	＜イラン祖語	*ā*θr*a-（アヴェスタ語 ā*tar*š「火」＜印欧祖語 *ā*ter*-s）
	＜インド・イラン祖語	*ā*tr*a-
	＜印欧祖語	*ā*tr*-o-s「火，煤（すす）」
	＞ラテン語	āter, ā*tr*a, ā*tr*um「黒い」
〈後分〉		-μπασα *f.*「最も良い（女神）」
	←スキタイ語	*βašā *f.*
	＜イラン祖語	*wah*išθā f.*
	（C. B. Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*）	
	＜インド・イラン祖語	*wás*išt^{h}ā f.*
	（＞梵語	vás*iṣṭhā f.*）
	＜印欧祖語	*wés-*is-t-H$_2$-eH$_2$ f.*
		*wés-*is-t-H$_2$-o-s m.*《最上級》

ヘロドトス『歴史』第 4 巻 6 節に *(F)Aὐ*-χάται（原義「良き人々」）というスキタイの支族が出て来たが，その前分の(F)Aὐ-（←*wah*u*-）がこの原級である。

印欧祖語の段階で形容詞の級に関しては次のような決まり事があった。

原　級	*-*u*-s, *-ró-s, *-nó-s
比較級	*´-jōs *m./f.*
	*´-jos *n.*
最上級	*-is-t-H$_2$o-s[16]
	*-is-m̥-H$_2$o-s[17]

これは発見者の名をとり，*Caland's system* と呼ばれた（Szemerényi 1990：204–205, Beekes 1994：199）。このシステムがスキタイ語にも保存されていたことがわかるのである。

（16） インド・イラン語派（梵語 -iṣṭhas, アヴェスタ語 -išta-），ギリシャ語（-ιστος），ゲルマン語派（ゴート語 -ista, 英語 -est, ドイツ語 -(e)st）の最上級の原形である。この接尾辞はアンミアーヌス・マルケッリーヌス『事績』第 28 巻 5 章 14 節（Ammianus Marcellinus *Res gestae* 28. 5. 14）にもゲルマン語派のブルグンド語の形で Sin*istus*「最高神官」（原義「最長老」）と記される語に現れる。

（17） イタリック語派（ラテン語 -issimus, mā*ximus*「最も大きい」＜*mā*χsamos*＜*mag-(*i*)*samos*），ケルト語派（ガリア語 Bel*isama* 原義「最も輝ける女神」，ケルトイベリア語 leT(a)*iśama*（＞スペイン *Ledesma*）原義「最も幅広い」）の最上級の原形である（Yoshida 2010：16–17）。

▼Caland's system

	《原級》	《比較級》	《最上級》
ギリシャ語	ἡδύς	ἡδίους[18]（*pl. nom.*）	ἥδιστος
梵語	svādús	svā́dīyas-	svā́diṣṭhas
英語	sweet	sweet*er*	sweet*est*
印欧祖語	*sweH$_2$d-*ú-s*	*swéH$_2$d-*ijōs*	*swéH$_2$d-*is-t-H$_2$-o-s*
		*swéH$_2$d-*ijos*-es（*pl. nom.*）	
	「甘い」	「より甘い」	「最も甘い」

▼スキタイ語に保存される Caland's system

	《原級》	《最上級》
スキタイ語	*Aὺ*-χάται	Ἀργί- *μπασα*
	*wah*u*-	*βašā *f.*
アヴェスタ語	vah*u*-	vah*išta*-（Beekes 1988：136）
梵語	vás*us*	vás*iṣṭhas*
インド・イラン祖語	*wás*uš*	*wás*ištʰas*
印欧祖語	*wés-*u-s*	*wés-*is-t-H$_2$-o-s*
イリュリア語	*Ves*-clevesis（原義「良き誉れを持つ」）	

ⅲ．iH$_2$- 語幹（英 *iH$_2$-stem*）

Ἀπί（スキタイの大地の女神）Hdt. 4.59

←スキタイ語　*Apī́

＜印欧祖語　*H$_2$ep-*íH$_2$*[19]

---

(18)　ἡδίους / hɛ:dío:s / ＜ギリシャ祖語 *hwādíjohes ＜ 印欧祖語 *swā́d*ijos*es ＜ *swéH$_2$d-*ijos*-es（*m./f. pl. nom.*）

(19)　これは本来零階梯（ゼロかいてい）の語根か接尾辞についた。この例のように発音上無理な場合は話が別だが，次の Ταβιτί←スキタイ語 *Tabatī́ のように音節形成の子音（ここでは *n̥）が可能な場合は，現在分詞 *-ent-～*-ont- は *e～*o を落として *tep-*n̥t*-íH$_2$ という形になった（Beekes 1988：191）。

▼零階梯の語根／接尾辞に付く *-íH$_2$

ヴェーダ語	vr̥tra-	*ghnī*（*Rigveda* 6. 61. 7）「敵を殺す」		sa*tī́*
	sapatna-	*ghnī*（*Rigveda* 10. 159. 5）「同僚を殺す」	アヴェスタ語	ha*tī*m *f. acc. sg.*
＜印欧祖語		*g^{wh}n-*íH$_2$*（零階梯）		*s-*n̥*t-*íH$_2$ f.*
～（動詞形）		*g^{wh}*é*n-t-i（e 階梯）	（男性形）	*s-*é*nt-m̥ *m. acc. sg.*
ヴェーダ語		h*á*nti「殺す」		s*á*ntam
ヒッタイト語		kuenzi/g^{w}éntsi/	ラテン語	-se*n*tem

この接尾辞は上表より明らかに *e が落ちた形，すなわち零階梯形（ゼロかいていけい）につき，アクセントを持ったのだとわかる（George Hinge 2006 *Herodot zur skythischen Sprache*）。

←　　*H_2óp-es（*pl. nom.*）　*gen.* *H_2ep-óm[20]
＞梵　　語　　ā́pas（*pl. nom.*）　*gen.* apā́m「水」

原義は「水に囲まれた土地」くらいの意味で，そこからスキタイ神話では大地の女神となった。末尾の -í は女性接尾辞で，ヴェーダ語の dēvī́ “goddess” の末尾と同じもの。ヴェーダ語の形より鑑（かんが）みるに，スキタイ語の-*í* はインド・イラン祖語，ひいては印欧祖語のアクセント位置を保存していると考えられる。下の例もそうである。

Ταβιτί（スキタイの竈（かまど）の女神　原義「燃え盛る女神」）Hdt. 4.59
←スキタイ語　*Tabatī́
＜インド・イラン祖語　*Tapatī́
（＞梵　　語　Tapatī）
＜印欧祖語　*tep-n̥t-*íH*$_2$《現在分詞女性形》
同根　ロシア語　тёплый/tëplyj「熱い」
ラテン語　tepēre「あたたかい，ぬるい」
tepēscere「暖まる」
（＜印欧祖語　*tep-*éH*$_1$-sk-e/o-《起動相》）

iv．i- 語幹（英 *i-stem*）
Νάπαρις（現？　原義「湿った所」）Hdt. 4.58［2×］
＜印欧祖語　*(s)nép-*or*-
同根　古代ペルシャ語　νάπας[21]「Persis 地方の山中の泉」
アヴェスタ語　napta-「湿った」
梵　　語　snapayati「湿らせる」
（＜印欧祖語　*snop-éj-e-t-i《使役》）
（Georgiev 1981：330）
Ὑπάκυρις（現 Молочная/Moločnaja 川）Hdt. 4.47, 55, 56
Ὕπανις（現 Южный Буг/Južnyj Bug 川　原義「川」）Hdt. 4.17, 18［2×］，47, 52［5×］，53［2×］，81［2×］
→スキタイ語　*up*a*n-iš（印欧祖語 *e＞インド・イラン祖語 *a＞スキタイ語 a）
＜印欧祖語　*up-*e*n-「川辺（かわべ）」

（20）　ラリンガル（羅 *laryngālēs*）の *H_2 はヒッタイト語の *ḫ*apā-š「川」，パラー語（109 頁註 13 参照）の *ḫ*apnaš「川」に保存されている。カリア語の *K*ΕΒΙΩΜΟΣ（Adiego 2007：334）の冒頭もそうだと思われる。
（21）　稀語や方言形を集めた，所謂（いわゆる）ヘーシュキオスの辞書に出て来る単語である。印欧祖語の *(s)nép-os に遡るか？

（*en＞ギリシャ語 ἐν，リューディア語 *ẽ-*，ラテン語 in（＜上代ラテン語 *en*）[22]，英語 in）

cf. リトアニア語　ùpė *f.*「川」（Georgiev 1981：329）

Ὕργις/*H*ýrgis（現 Донец/Donets　原義「湿地，湿った所」）Hdt. 4.57

*Σύ*ργις / *S*ýrgis　Hdt. 4.123

→スキタイ語	**h*urgis
＜	**s*urgis（イラン祖語 *Cr＞スキタイ語 *rC /V_V）
＜インド・イラン祖語	*sugris
＜印欧祖語	*(s)ug^{w}-ri-s
～	*(s)ug^{w}-ró-s
＞ギリシャ語	ὑγρός「湿った」

イラン語における *s＞h[23] がスキタイ語で起こりつつあったことがわかる。また，*Cr＞*rC /V_V は Ἀργί-μπασα（111 頁）でも起こっている。

ｖ．u- 語幹（英 *u-stem*）

Αὐ-χάται（原義「良き人々」）Hdt. 4.6

←スキタイ語	*wah*u*-
＜イラン祖語	*wah*u*-š
（＞古代ペルシャ語	Dāraya-*va*^{h}*u*š「善を保つ」→ギリシャ語 Δᾱρεῖος）[24]
＜インド・イラン祖語	*wás*u*-š
（＞梵語	vás*u*-「良い」）

（22）　通称 DVENOS 碑文と称される，ローマで見つかった紀元前 400 年頃の碑文では *en* manom einom というくだりで現れる。ラテン語の bonus「良い」の古形が DVENOS /dwénɔs/ として現れるので，この通称がある。

（23）　この変化は印欧語の中ではイラン語派，アルメニア語，ギリシャ語，ケルト語派ブリティッシュ語群，リュキア語（アナトリア語派）でも起こっている。世界的にもポピュラーな音韻変化である。

▼s＞h

アヴェスタ語	han*a*-	大阪方言	yara-*h*en	oba-*h*an	yari-*h*aru
アルメニア語	hin, *gen.* hn*o*y	文　語	yari-ya senu	oba-*s*ama	yari na*s*aru
ギリシャ語	ἕν*o*ς/hén*o*s	東京方言		oba-*s*an	
ウェールズ語	hen	※大阪方言を含む近畿方言（通称関西弁）では母音間で起こった。			
ガリア語	Sen*o*-gnātus				
リトアニア語	sẽn*a*s				
梵語	sán*a*s				
印欧祖語	*sén-*o*-s「古い」				

（24）　歴史上名高いダレイオス大王で，紀元前 490 年～489 年ギリシャと戦った（第一次ペルシャ戦争）。

＜印　欧　祖　語　　*wés-*u*-s　　～　　*wós-*u n.*
＞パ　ラ　ー　語　　wāš*u*/wā:s*u*/ *n.*[25]「良い」
リューディア語　　wiś*w*i-「良い」
イリュリア語　　Ves-clevesis（原義「良き誉れを持つ」）
（＝梵　　語　　vasu-śravás-）

Βορ*υ*-σθένης（現 Днепр/Dnjepr 川　原義「広い場所」）Hdt. 4.5, 18［3×］，24, 45, 47, 53［3×］，54［2×］，56［2×］，81, 101

〈前分〉　　Βορ*υ*-
←スキタイ語　　*war*u*-
＜印　欧　祖　語　　*H_1wor-*u*-s（o 階梯）
～　　*H_1ur-*ú*-s（零階梯）
＞梵　　語　　ur*ú*s「広い」
ギリシャ語　　εὐρ*ύ*ς[26]「広い」
（Georgiev 1981：329）

Πόρατα（現 *Prut* 川）Hdt. 4.58

Πυρετ*ό*ς　Hdt. 4.58
←スキタイ語　　*purt*ú*š
（＞オセット語[27]　fūrd）
＜インド・イラン祖語　　*pr̥túš
（＞アヴェスタ語　　pərət*u*š）
＜印　欧　祖　語　　*pr̥-t*ú*-s

(25)　パラー語ではアクセントのある *é は e のまま残るので，ā の祖形は *ó としか考えられない。尚，この長母音表記はラテン語で *scrīptiō plēna*「満ちた表記」と呼ばれ，ギリシャ語やヴェーダ語やリトアニア語のアクセント位置と対応するので，印欧祖語のアクセントを引き継いでいると考えられている。
パ　ラ　ー　語　　wērti /wé:rti/（*pres. 3sg.*）「呼ぶ」
＜印　欧　祖　語　　*wér-t-i
同根　ラテン語　　verbum *n.*「言葉，語」

(26)　ギリシャ語では *H_x＋i/u の組み合わせでは *H_x が反映し，二重母音となった（英 *Rix's law*）（Rix 1976：69）。
印欧祖語　　**H*$_2$*u*s-ṓs *f.*　　～*H_2éus-ōs *f.*
梵　　語　　*u*ṣā́s *f.*「曙」
ギリシャ語　　*αὔ*ως（レスボス方言）
ἀ̈(*F*)ώς（ドーリス方言）
ἠ(*F*)ώς（イオニア方言）
ἕως（アッティカ方言）*f.*
ラテン語　　aurōr-a *f.*「曙（光）」

(27)　ロシア連邦北オセチア共和国並びにグルジア共和国南オセチア自治州に跨（また）がった地域で話されるイラン系の言語。スキタイ語の子孫だと考えられている。

＞ラ　テ　ン　語　　port*u*s, -*ū*s *m*.「港」
ゲルマン祖語　　*furð*ú*s[28]
（＞英　　語　　ford
ド　イ　ツ　語　　Furt *m*.「浅瀬，徒渉箇所」）
（Georgiev 1981：330, 335）

Τάνα(F)ϊς（現 Дон/*Don*　原義「川」）Hdt. 4.20, 21, 45, 47, 57［2×］
←ス　キ　タ　イ　語　　*Dā́n*aw*-
sg. nom.　　*Dā́n*u*š[29]
（＞オ　セ　ッ　ト　語　　don「川」）
＜インド・イラン祖語　　*dā́n*u*(-š)
（＞梵　　語　　dā́n*u n*.「露，雫」）
＜印　欧　祖　語　　*déH$_2$-n-*u*-s
＞ガ　リ　ア　語　　Dān*uv*ius（＞独 *Donau*）
（Georgiev 1981：329）

vi．黙音幹（英 *mute stem*）

Ἑξαμ-παῖος（原義は古代ギリシャ語イオニア方言で Ἱραὶ ὁδοί「聖なる道々」）Hdt. 4.52

---

(28)　印欧祖語時代の無声閉鎖音 *t の直前音節にアクセントがないので，一旦摩擦音化して *θ となったあと，有声化して *ð となった（ヴェルネルの法則（英 *Verner's law*））。
印　欧　祖　語　　*pr̥*t*ú̯s
＞初期ゲルマン祖語　　*fur*θ*ú̯s
＞ゲルマン祖語　　*furð*ú̯*s（英 *Verner's law*）
＞先ドイツ語　　*fur*d*u
＞ド　イ　ツ　語　　Fur*t*（第二次子音推移（独 *zweite Lautverschiebung*））。
上表のようにドイツ語では硬化して *d となったあと（*furðús＞*fur*d*u），有声閉鎖音が無声閉鎖音になるというグリムの法則（英 *Grimm's law*）と全く同じことが起こって（第二次子音推移（独 *zweite Lautverschiebung*）），*d＞t となり，Fur*t* が成立した（吉田育馬 2011：177–179，ヨアヒム・シルト著　橘好碩訳 1999：43–48）。尚，このヴェルネルの法則により，印欧祖語時代にはアクセントは無声閉鎖音 *t の前になかった，つまり，この場合に限っては接尾辞部の *u にあったことがわかり，ヘロドトスの記録にあるスキタイ語のこの単語とアクセント位置が一致し，スキタイ語はアクセントを保存していたことがわかる。

(29)　スキタイ語では以下のように曲用したと考えられる。
単数主格 *Dān*u*š
呼格 *Dān*au*
対格 *Dān*u*m
属格 *Dān*au*š
与格 *Dān*aw*ai
地格 *Dān*ā*(*u*)
具格 *Dān*ū*
つまり，ギリシア語に借入されるにあたって与格語幹か属格・呼格語幹が採用された訳であり，アッティカ地方のギリシャ語だけではなく，小アジアのイオニア地方のギリシャ語でも本来の F，$_{\text{F}}$/w/は消えたので，*Dān*aw*-is＞*Dān*a*ïs→Τάναϊς となったと考えられる。

〈前分〉	’Εξαμ-「聖なる」		
〈後分〉	-παῖος「道々」		
←スキタイ語	*pāyah[30]（*pl. nom.*）		
＜	*$pā\underline{\theta}$-ah[31]		
←イラン祖語	*pantāh（*sg. nom.*）	*gen.*	*$pa\underline{\theta}$ah
（＞アヴェスタ語	pantā̊	*gen.*	pa*θ*ō）
＜インド・イラン祖語	*pántās（*sg. nom.*）	*gen.*	*pa*t*^{h}ás
（＞梵語	pánthās	*gen.*	pa*th*ás）[32]
＜印欧祖語	*p*é*nt-oH_2-s（*sg. nom.*）	*gen.*	*p*n̥*t-H_2-és
	（e 階梯）		（零階梯）
～	*p*ó*nt-s（*sg. nom.*）	*gen.*	*p*n̥*t-és《語根名詞》
	（o 階梯）		（零階梯）
＞ラテン語	pō*n*s, p*on*tis *m.*「橋」		
ギリシャ語	πό*ντ*ος *m.*「海」		πά*τ*ος *m.*「道」
ロシア語	п*у*ть/p*u*t´ *m.*「道」		
（＜スラブ祖語	*pǫti *m.*）		
古プロシア語			p*in*tis[33]

（C. B. Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*）

Τιάραντος（現 *Siret* 川　原義「急流」）Hdt. 4.58［2×］

←スキタイ語	*č*á*ra*nt-「動いている，激しい」
＜印欧祖語	*k^w*é*l-ont-[34]　（*-ont-《現在分詞》＞ギリシャ語 -*ο*ντ-ος（*sg. gen.*））
＞ラテン語	colent-is（*sg. gen.*）（*sg. nom.* colēns←colō, -ere）「耕している」

（Georgiev 1981：330）

---

(30)　イラン祖語 *θ＞スキタイ語 *y/V_V（C. B. Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*（ネット論文））

(31)　スキタイ語　*-ah
　＜印欧祖語　*-es（*pl. nom.*）
　＞ギリシャ語　-ες
　古期リトアニア語　-es
　古教会スラブ語　-e（ロシア語 четы́*ре*/četýr*e* “quattuor”）

(32)　梵語の無声有気閉鎖音/t^h/に曾（かつ）てのラリンガル *H_2 の痕跡が残る。*H_2 はいずれも軟口蓋系（なんこうがい）の摩擦音/χ/または/x/であったろうと考えられている。これが無気音 *t を有気音/t^h/にした。

(33)　印欧祖語 *n̥＞バルト祖語 *in＞古プロシア語 in，リトアニア語 į

(34)　語根が e-階梯のとき，アクセントが現在分詞語尾ではなく，語根部に落ちるのはギリシャ語の現在分詞 λείπ-οντ-ος（*sg. gen.*）「残している」を参照のこと。これが幹母音型アオリストだと語根部が零階梯になるので（語根部の母音 e が落ちること），アオリスト分詞は λιπόντ-ος（梵語 ric*á*nt-）「残した」となり，接尾辞部にアクセントが落ちる。印欧祖語ならびにスキタイ語の推定形のアクセントはこれに基づいており，ヘロドトスの記録によると，スキタイ語は印欧祖語時代のアクセント位置を保存していたこととなる。112–3 頁 Ἀπί, 112 頁註 19, 113 頁 Ταβιτί, 115–6 頁 Πυρετός, 116 頁註 28, 116 頁 Τάνα(ϝ)ϊς も参照のこと。

最初のものは語根名詞で，印欧語全体に広く対応があるが，スキタイ語では斜格幹（英 *oblique stem*）で統一された。これは印欧語で祖語段階から極（ごく）当たり前に行われたことであった。印欧祖語では本来，主格／対格 e/o 階梯：斜格零階梯の母音交替を行なった。

▼印欧祖語の語根名詞の母音交替

α）伝存諸言語で一部保存されているもの

	印欧祖語		梵　語	リトアニア語	他の印欧語	
複数主格	*d^{h}*wóṛ*-es	（o 階梯）＞	d*vā́*ras	d*ùr*es（方言）	ラ テ ン 語	f*or*ēs
属　　格	*d^{h}*ur*-óm	（零階梯）＞	d*ur*ā́m	d*ùr*ų	ギリシャ語	θ*ύρ*ᾱ[35]
	“*door*”		“*door*”	“*door*”		“*door*”

※リトアニア語は語根名詞の姿を残すが，斜格の零階梯で統一

β）伝存諸言語ではいずれかの語幹で統一されたもの

	印欧祖語			
単数対格	*w*ói*k-m̥	（o 階梯）	＞ギリシャ語	(F)*oĭ*κα-δε「家へ」
属　　格	*w*i*k-és	（零階梯）	＞梵　語	v*i*śás（*nom. sg.* víṭ）

Ⅲ．スキタイ語における音韻変化とスキタイ語の帰属

印欧祖語からインド・イラン祖語そしてイラン祖語を経てスキタイ語に至る過程には次のような音韻変化が起こった。

▼印欧祖語からスキタイ語への音韻変化

*d^{h}＞*d＞*ð＞l	Σαύλιος（106 頁）
*d＞*ð＞l	Σκύ*θ*αι（108 頁），Σκύλης（107 頁），Σκολότοι（108 頁），Παρα-*λ*άται（108 頁）
*g^{w}＞g	*Γ*οιτό-συρος（106 頁），Σύ*ρ*γις/Sýrgis～ Ὕ*ρ*γις/Hýrgis（114 頁）
*p＞p	Ἀ*π*ί（112–3 頁），Ν*ά*παρις（113 頁），Ὕ*π*ανις（113–4 頁），*Π*ό*ρ*ατα ～ *Π*υρετός（115–6頁），Ἑξαμ-*π*αῖος（116–7 頁）
*t＞ t	*T*ύρης（107 頁），Παρα-λάται（108 頁），*T*αβιτί（113 頁），Πόρατα ～ Πυρετός（115–6 頁）
*k＞s	Ἀριμ-*α*σποί（107 頁）
*k^{W}＞č(τι)/_i ～ e	*Τι*άραντος（117 頁）
*θ＞y/V_V	Ἑξαμ-*π*αῖος（116–7 頁）
*s＞s＞h	*Σ*ύ*ρ*γις/*S*ýrgis～ Ὕ*ρ*γις/*H*ýrgis（114 頁）
*sw＞x^{w}	*Κ*ολά-ξαϊς（109–110 頁）

（35）　英語の door は古英語では d*ur*u で斜格幹の零階梯から。

*Cr＞rC	Ἀρπό-ξαϊς（108–9 頁），Ἀργί-μπασα（111 頁），Σύργις/Sýrgis～Ὑργις/Hýrgis（114 頁）
*r̥＞ur?	Πυρετός（115–6 頁）
*n̥＞a	Ἑξαμ-παῖος（116–7 頁）
*e＞a	Ἀριμ-ασποί（107 頁），Ἀργί-μπασα（111 頁），Αὐχάται（112, 114–5 頁），Ταβιτί（113 頁），Νάπαρις（113 頁），Ὑπανις（113–4 頁），Τάνα(ϝ)ϊς（116 頁），Τιάραντος（117 頁）
*o＞a	Θαγιμασάδας（106 頁），Σκύθαι（108 頁），Παρα-λάται（108 頁），Ἀρια-πείθης（109 頁），Κολά-ξαϊς（109–110 頁），Ὀκταμα-σάδης（110 頁），Ἐνάρεες（110 頁），Αὐχάται（112, 114–5 頁），Νάπαρις（113 頁），Τιάραντος（117 頁）
*a＞a	Ἀριμ-ασποί（107 頁），Ἀρπό-ξαϊς（108–9 頁），Λιπό-ξαϊς（109 頁），Ἀρια-πείθης（109 頁），Κολά-ξαϊς（109–110 頁），Ἀπί（112–3 頁）
*ē(＜eH_1)＞ā	Παρα-λάται（108 頁）
ā(＜H_2ē, eH_2)＞ā	Ἀρπό-ξαϊς（108–9 頁），Ἀργί-μπασα（111 頁），Τάνα(ϝ)ϊς（116 頁）
*ī(＜*iH_2)＞ī	Ἀπί（112–3 頁），Ταβιτί（113 頁）
*oi＞ai	Γοιτό-συρος（106 頁）
*ou＞au	Σαύλιος（106 頁）

結論から先に言うと，スキタイ語はインド・イラン語派のイラン語派の東イラン語群である。

▼印欧語間の音韻対応

印欧祖語	*e	*o	*a	*n̥	*m̥	*k^wi	*k^we
インド・イラン語派	a	a	a	a	a	či	ča
ギリシャ語	ε	o	α	α	α	τι	τε
ラテン語	e～i	o～u	a～e～i	en	em	qui/k^wɪ/	que/k^wε/
英語	e	a	a	un	um	whi/hwi/	whe/hwe/

まず，スキタイ語がインド・イラン語派であるということは次の対応からわかる。

▼インド・イラン語派と他語派との具体的対応

ヴェーダ語	dáśa	pátis	ájras	-ca	tatás
アヴェスタ語	dasa	pa^{i}tiš		-ča	※2 言語がインド・イラン語派
ギリシャ語	δέκα	πόσις	ἀγρός	τε	τατός
ラテン語	decem	potis	ager	-que	tentus
英語	ten		acre	through	
印欧祖語	*dékm̥	*pót-i-s	*ag-ró-s	*-k^we	*tn̥-tó-s
	「10」	「主人」	「畑」	「も」	「延びた」

▼インド・イラン語派としてのスキタイ語

スキタイ語	T*α*βιτί	’E*ν*ά*ρ*εες	*Ἀ*ριμ-*α*σποί	’E*ξ*αμ-*π*αῖος
ヴェーダ語	T*a*patī	sūn*á*ra-		p*a*thás（*gen.*）
他の印欧語	t*e*pidus（Lat.）	*ἀγ*-ή*νο*ρες（*pl.*）（Gk.）	*a*rimom（*acc.*）（Lusit.）(36)	p*in*tis（OPruss.）
印欧祖語	*t*e*p-n̥t-íH$_2$	*-H$_2$nor-es（*pl.*）	**a*r-imo-m（*acc.*）	*pm̥t-H$_2$-és（gen.）

しかもこれがインド語派ではなくイラン語派である。

▼インド語派とイラン語派の音韻対応上の違い

印欧祖語	*k	*kw	*s	*sw
イラン語派	s	sp	h	x^{w}（16 頁）
インド語派	ś/ʃ/	śv	s	sv
ラテン語	c/k/	qu/k^{w}/	s	s/s/〜su/sw/

▼インド語派とイラン語派の具体的な音韻対応

アヴェスタ語（イラン語派）	*s*atəm	as*p*a-	*h*apta	*x^{v}*aŋ*h*ar-
ヴェーダ語（インド語派）	*ś*at*á*m	á*ś*vas	*s*apt*á*	*sv*ásār-am（*sg. acc.*）
ギリシャ語	*ἑ*-*κατ*ό*ν*		*ἑπτ*ά*/*h*ept*á*	*ἔ*ο*ρες（*pl.*）
ラテン語	*c*entum	e*qu*os	*s*eptem	soro*r*
英語	*h*und-red		*se*ven(37)	*Sch*w*e*ster（独）
印欧祖語	**k*m̥t*ó*m	*é*kw*o-s	**sept*m̥	**sw*és*o*r-m̥
	「100」	「馬」	「7」	「姉妹」

下の対応よりスキタイ語は最終的には東イラン語群に所属することがわかる。

▼イラン語派内の東西の音韻対応上の違い

印欧祖語	*sw	*kw
東イラン	x^{w}	sp
西イラン	f	s

(36) Lusitanian ルシタニア語　ローマ時代 Lūsītānia と呼ばれていた現在のポルトガルで話されていた古代語で，ケルト語派に非常に近い言語である。直接資料としては僅かに 6 枚の碑文を残すのみであるが，間接資料としてはローマ時代に記録された，Lusitania の地名，部族名に多々残る。一部は現在のポルトガルの地名（Coimbra, Setúbal 等）として残っている。

(37) 印欧祖語時代の無声閉鎖音 *p の直前母音にアクセントがないので，ゲルマン語では一旦摩擦音化して *f になったあと，有声化して *β になった（ヴェルネルの法則（英 *Verner's law*））。

インド語派	sv	śv
ラテン語	s(u)	qu

▼東イラン語としてのスキタイ語

スキタイ語（東）	Κολάξαϊς	*X^{w}arya-xšaya-	Ἀριμ -ασποί
古代ペルシャ語（西）		-*f*arnā^{h}(38)「栄光」	asam（*acc.*）Behistun 大碑文第一欄
ラテン語		*s*ōl＜*sH_2wŏl	e*qu*om（*acc.*）
印欧祖語		*sH_2wel-	*é*kw*o-m

ただ，スキタイ語独自の変化もあり，印欧祖語時代ならびにインド・イラン祖語時代の*d, *d^{h}，すなわちイラン祖語での *d が *d＞ð（7c. B.C.迄）＞l（5c. B.C.迄）（106 頁脚注（６））と変化したのはスキタイ語を含む幾つかの言語だけであり，その分布地域からスキタイ語が東南イラン語群であると迄断定できる（C. B. Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*）。

▼スキタイ語の他の*d＞ð（7c. B.C.迄）＞l（5c. B.C.迄）の例

	Σκίλουρος	Πάλακος			μελύγιον（Hsch.）
←Scyth.	*ski*l*uras	*pā*l*akas			*ma*l*uwiyam
			←		*ma*l*u
＜	*ski*ð*uras	*pā*ð*akas			*ma*ð*u
＜pIr.	*ski*d*urás	*pā*d*akás			*ma*d*u *n.*
			（＞	Av.	ma*δ*u-cā）
＜pIn.-Ir.	*ski*d*urás	*pā*d*akás			*má*d^{h}*u *n.*
	←	*páts	*acc.* *pád*am		
（＞Ved.	chi*d*urás	pát	*acc.* pád*am* *m.*		「足」má*dh*u *n.*）
＜IE	*ski*d*-u-ró-s	*pós	*acc.* *pó*d*-m̥ *m.*		*mé*d^{h}*-u *n.*「蜂蜜（酒）」
＞Gk.		πώς（Dor.）	*acc.* πόδα *m.*		μέθυ *n.*「葡萄酒」
OE		fōt *m.*			meo*d*u
（＞E.		foot			mea*d*「蜂蜜酒」）
OHG		fuoz			me*t*u
（＞G.		Fuß *m.*			Me*t*「蜂蜜酒」）
Gaul.					Me*d*u-genus
Lith.					me*d*ús

（38） Behistun 大碑文第三欄 84, 86, 88 行と第四欄 83 行に Vi^{u}da-*farnā*^{h}（→ギリシャ語（F）Ἴντα-*φέρνης*）という人名の後分として現れる。前分は梵語の vindáti「見いだす」と対応し（英語の wit やラテン語の videō, -ēre「見る」も同根），全体としての原義は「栄光／輝きを見いだす者」である。

cf. Goth.　skai*t*an
（C. B. Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*）

Russ. мед̲в̲-едь「熊」
（＜*「蜂蜜食い」）
※-е́дь *cog.* Lat. edō, Hitt. ēdmi, E. eat

イ ド ガ 語	*l*ad	
＜インド・イラン祖語	**d*ántas（*pl. nom.*）	
（＞梵　　語	*d*ántas）	
＜印 欧 祖 語	*H_1*d*-ént-es ～	*H_1*d*-ónt-es
＞ラ テ ン 語	*d*entēs “*t*eeth”	
ギ リ シ ャ 語		οδόντες “*t*eeth”

尚（なお），*θ＞y/V_V と *Cr＞rC（C＝consonant 子音）もスキタイ語独自の変化である。

印欧祖語時代，インド・イラン祖語時代の二重母音が二重母音のまま保存されたのもイラン語派の特徴だが，スキタイ語でもそのままで ai（表記上は οι），au という形で現われた。この特徴以外にもスキタイ語の持つ古風な面としては印欧祖語時代，インド・イラン祖語時代のアクセント位置がかなりの部分保存されたことが挙げられる。*-*u*-s に終わる形容詞の比較級，最上級に纏（まつわ）る *Caland's system* も保存された（111–2 頁）。

▼印欧祖語時代のアクセント位置の保存

スキタイ語	Τιάραντος	Νάπαρις[39]	Τάνα(F)ϊς	Πυρετός	Ἀπί	Ταβιτί
＜印 欧 祖 語	*k^{W}él-ont-	*(s)nép-or-	*déH$_2$-n-ew-	*pr̥-tú-s	*H$_2$ep-íH$_2$	*tep-n̥t-íH$_2$
cf. ヴェーダ語			dā́nu *n.*	itús *m.*	dēví *f.*	satī́ *f.*
ギリシャ語	λείπ-οντ-ος	ἐέλδωρ *n.*	（116 頁）	（115–6頁）	（112–3頁）	（113 頁）
	（117 頁）	ἕλωρ *n.*				
		πέλωρ *n.*				
		τέκμωρ *n.*（113 頁）				

Ⅳ．スキタイ語に残る印欧語本来の語順と形態論

スキタイ語が書かれたまともな直接資料がない以上，スキタイ語の語順はほかのところから推定せざるをえない。

ところで，世界の諸言語において複合語では本来の語順が保存され，実際に文章を書く順番に要素が

（39）　このように１単語の中に *e, *o 両方がある場合，印欧祖語の古い時代には *e にアクセントがあった。ここで挙げている例以外にはギリシャ語の ποιμήν, *acc.* ποιμένα（リトアニア語 píemenį）*m.*「牧夫，牧人」，πέδον *n.*（ヒッタイト語 pēdan/pé:dan/*n.*）「大地」，(F)ἔργον *n.*（ドイツ語 Werk *n.*）「仕事」，ἔορες *f. pl.*《稀語》（梵語 svásāras *f. pl.*，ドイツ語 Schwester）「姉妹達」等がある（吉田育馬 1993：73–75，1998：54–56）。

並ぶという事実がある（松本 2006：129–153, 169–176）。

▼複合語に保存される文の語順

ラテン語

agri-	cola「農夫」	Ahēno-	barbus *m.*（男性名）	tri-	folium *n.*「クローバー」
agrum	colere	aēna	barba	tria	folia
O	V	A	N	Num	N
「畑を	耕す」	「青銅の	髭（ひげ）」	「三つ	葉」

日本語

yama-	nobori「山登り」	aka-	hige「赤髭」	mitsu-	ba「三つ葉」	tara-	ko「鱈子（たらこ）」
O	V	A	N	Num	N	G	N
「山に	登る」	「赤い	髭」	「三つの	葉」	「鱈の	子」

漢　語

登	山
V	O

（吉田育馬 2009：56–60）

スキタイ語の複合語を調べてみると以下のようになる。

▼複合語の中に見られるスキタイ語の語順

ⅰ）動詞と目的語

Λιπό-	ξαϊς（109 頁）	Ἀρπό-	ξαϊς（108–9 頁）	Κολά-	ξαϊς（109–110 頁）
O	V	O	V	O	V
山を	統べる	水を	統べる	太陽を	統べる

ⅱ）形容詞と名詞

Βορυ-	σθένης（106–7 頁）	Κα-	τίαροι	Τρ-	άσπιες
A	N	A	N	A	N
広い	場所	良き	牧場（持つ）	強き	馬（持つ）

Ἀριμ-	ασποί（107 頁）	Ἐξαμ-	παῖος（116–7 頁）
A	N	A	N
最高の	馬（持つ）	聖き	道道

ⅲ）副詞と動詞

Παρα-	λάται（108 頁）
Adv.	V
前に	置かれた

上に見られるように，少なくとも複合語の証拠においてはスキタイ語は日本語と同じ語順をしていたと言え，同じ印欧語族の古代語ラテン語（イタリック語派）とも同じである。これは古くから言われていることではあるが，ヒッタイト語でも梵語でも同じ語順に並ぶので，印欧祖語は比較的緩やかな OV, AN 型言語であり，スキタイ語にもそれが受け継がれていたと考えられる（Lehmann 1974：30–56, 吉田育馬 2009：56–60）。これは書かれた資料の殆どない古代バルカンでも同様であり，碑文が 1 枚しかないダーキア語（ルーマニアの先住民）でも AN, GN 型である。

▼ダーキア語の複合語の固有名詞に見られる印欧語本来の語順

Salmor-	ude	Pāta-	vissa	Βαρδ-	ουάριος	Ἀξι-	ούπολις
		（＞Pota-	issa）	Οὐαρδ-	ουάριος		
A	N	A	N	A	N	A	N
「塩辛い	水（塩湖）」	「大きな	家」	「黒い	川」	「黒い	小川」
Pulpu-	dēva	Πολόν-	δαυα	κιν-	ούβοιλα[40]		
（＞ブルガリア *Plovdiv*）		（＞Pelen-	dova）				
G	N	G	N	G	N		
「ピリッポスの	町」	「雌馬達の	町」	「犬の	林檎」		

（吉田育馬 2008：81）

また，ヘロドトス『歴史』第 4 巻 17 節に出て来る，ボリュステネース川 Βορυσθένης（現ドニエプル川 Днепр/Dnjepr）下流域に住む，「農民スキタイ」の原語 Σκύθαι γεωργοί の後半部分「農民」にあたる語であるが，考古学的調査によると農耕をした形跡もなく，その名称自体が疑わしいので，スキタイ語の全く別の意味の単語が似た形のギリシャ語の「農民」で写された可能性があると言う。ソ連のオセット系ロシア人学者アバーエフ Абаев/Abaev はスキタイ語の *gau-warga-「家畜を繁殖させる」を写したものであると考えている（雪嶋 2008：164）。前半の *gau- は梵語の gā́uṣ, ラテン語の bōs, bovis *c.*「牛」，ギリシャ語の βοῦς *f.*, 英語の cow，ドイツ語の K*uh*（＜古高地ドイツ語 ch*uo*）と同源で，印欧祖語の *gʷóu-s *f.*「牝牛」に遡るので，*-warga- が「繁殖させる」で，「牝牛を繁殖させる」という語順で並んでいる。したがって，この語も OV 型であり，スキタイ語は印欧祖語の OV 型語順を引き継いでいたと考えられる。ちなみに系統的にも近い，同じイラン語派の古代ペルシャ語は Behistun の大碑文等から判断する限り，完璧な OV 型である（山中 2008：69）。

（40） ディオスコリデース『薬物誌』（西暦 1 世紀）第 4 巻 184 節に出て来る薬草のダーキア語名として出ている。κιν- はギリシャ語 κύων *m.*「犬」の属格 κυν-ός の語幹 κυν-，リトアニア語 šuõ「犬」の属格 šuñ-s（＜šun-ès）の語幹 šun-に対応し，英語の *hou*nd やドイツ語の *Hu*nd *m.*「犬」にも対応する形で，「犬」を意味する（Georgiev 1981：122）。後分の -ούβοιλα は南イタリアの古代地名 Abella（＞伊 *Avella*）や英語の apple やドイツ語の Apfel に対応し，「林檎」を意味した。したがって，全体としては「犬の林檎」であった。学名を *Bryonia alba* という薬草である。

形態論に関しては活用，曲用レベルで全くわからないのが至極残念であるが，第Ⅱ章でも詳しく論じたように，語根の母音交替（英 *vowel gradation,* 独 *Vokalwechselung, Ablaut*）や，-a-, -i-, -u- といった幹母音（英 *thematic vowel*）も含めた語幹の形は印欧祖語，インド・イラン祖語の姿をよく保存している。曲用の際の母音交替も保存されていたらしいことは 116 頁註 29 でも記したとおりであるが，u-語幹の母音交替は他の印欧語ともよく一致する。

▼スキタイ語に保存された u- 語幹の母音交替

	単数主格	属　　格
スキタイ語	*Dán*u*š	*D<u>á</u>n*au*š（→Τάν*α*(*ϝ*)-ϊς）
梵　　語	dán*u*	dánōs
	sūn*ú*s	sūnṓs
リトアニア語	sūn*ù*s	sūn*aũ*s
ゴート語	sun*u*s	sun*au*s
印欧祖語	*suH$_x$-n-*ú*-s	*suH$_x$-n-*óu*-s
上代ラテン語	senāt*u*s	senāt*ou*s（＞古典形 senātūs）

Ⅴ．纏　め

前章迄で検討してきたように，スキタイ語は印欧語としての形態論を少なくとも語幹レベルでは語根部の母音交替やアクセント位置も含め，印欧祖語の姿を色濃く残し，複合語での並びより推定するに，語順も OV, AN 型であり，印欧祖語のそれを引き継いでいると考えられる。この OV 型語順は日本語や恐らくそれが所属すると考えられるアルタイ語族（満洲・ツングース語群，モンゴル語群，チュルク語群），シュメール語等も含め，ユーラシア大陸に広く分布している型であり，印欧祖語もそのひとつであった。そして，スキタイ語自身もヘロドトス『歴史』第４巻に記録された固有名詞より推定するに，印欧語族インド・イラン語派イラン語派東イラン語支東南イラン語群という詳細レベル迄，その所属が推定出来る。

このようにヘロドトス『歴史』というギリシャ人が書いた歴史書にたまたま記録されている固有名詞からも，現代の比較言語学では直接資料のない古代語の系統的所属や語順や語幹レベルの形態論迄推定出来るのである。古典古代の記録は自らは文献記録を残さなかった諸民族の言語の宝庫であり，それは現代比較言語学によって，具体的な曲用・活用はわからないものの，詳細レベル迄明らかにすることが出来るのである。

参考文献

Adiego 2007 *The Carian Language,* E. J. Brill（Leiden/Boston）
Beekes, Robert S. P. 1988 *A Grammar of Gatha-Avestan,* E. J. Brill（Leiden）
――― 1994 *Comparative Indo-European Linguistics* An Introduction, John Benjamin's Publishing Company

（Amsterdam/Philadelphia）
Georgiev, I. M. 1981 *Introduction to Indo-European Languages,* Publishing House of the Bulgarian Academy of Sciences（Sofia）
Hinge, George 2005 *Herodot zur skythischen Sprache*（ネット論文）
Kent, Roland G. 1953 *Old Persian,* American Oriental Society（New Haven, Connecticut）
Кулланда 2006 *Ещё раз о скифском языке*（ネット論文）
Lehmann, Winfred P. 1974 *Proto-Indo-European Syntax,* University of Texas Press（Austin and London）
松本克己（かつみ） 2006『世界言語への視座 ── 歴史言語学と言語類型論』三省堂（東京都千代田区）
Rix, Helmut 1976 *Historische Grammatik des Griechischen,* Wissenschaftliche Buchgesellschaft（Darmstadt）
Szemerényi, Oswald 1990 *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft* 4.（vierte）, durchgesehene Auflage, Wissenschaftliche Buchgesellschaft（Darmstadt）
山中元 2008『古ペルシャ語 ── 古代ペルシャ帝国の碑文を読み解く ──』国際語学社（東京都豊島区）
ヨアヒム・シルト著　橘好碩（よしみ）訳 1999『［図説］ドイツ語の歴史』大修館書店（東京都千代田区）
吉田育馬 1993「印欧祖語における amphikinetic type の名詞パラダイムの生成過程」『言語学論叢』1993 年特別号松本克己教授退官記念論文集（筑波大学一般応用言語学研究室）72–87 頁
──── 1998「古代ギリシャ語における畳音式名詞の現れとその印欧語的解析」『言語学論叢』1998 年第 17 号（筑波大学一般応用言語学研究室）51–69 頁
──── 2008「古代ルーマニアのダーキア語に就いての覚書」『桜美林論集』（桜美林大学）第 35 号 75–88 頁
──── 2009「ラテン語の系統と構造」『桜美林論集』（桜美林大学）第 36 号 51–70 頁
──── 2011「ゲルマン語派と印欧語族」明治学院大学教養教育センター『カルチュール』第 5 巻第 1 号 163–181 頁
YOSHIDA Ikuma 2010 *The Celtic Languages as Indo-European*『ケルティック・フォーラム』第 13 号（日本ケルト学会）12–24 頁
雪嶋宏一 2008『スキタイ　騎馬遊牧国家の歴史と考古』（ユーラシア考古学選書）雄山閣（東京都千代田区）